

大阪文化の

自律自走を!

コンパクトに集積している京都では、産学公が教育現場とも非常に密接に結びついているように思えます。例えば今年2月に「京都モノづくりの殿堂(上京区/京都市教育委員会)」がオープンし、京セラや日本電産、任天堂といった京都発祥の大手企業16社の創業の精神を子どもたちに学ばせています。また、京都市と京都精華大学が共同で小学校跡地に『京都国際マンガミュージアム』をつくり、マンガコンテンツ産業を振興するとともに、子ども向けにマンガ化された教材を使って、起業家精神や経営者の生きざまを学ぶ授業も進められています。こうしたことは大阪であり聞いたことがありません。先般の関西財界セミナー(2月5日・6日/国立京都国際会館)においても、7つの分科会のうち教育や文化をメインテーマとするものがなかった。経営、経済、政治に関するものが多く、100年に1度といわれる経済危機においてはそれで当然なのかもしれませんが、こういう時代だからこそ、もっと文化について語り、身近なところで人づくりをしてほしいと思いますね。

田中 文化のプロデュースや連携という観点でいえば、京都の花街にも学ぶところがあります。お茶屋の女将は宴会のプロデューサーで、芸妓や舞妓はタレント、置屋はタレントプロダクション、見番はいわば旅行代理店みたいなもの。踊りを教える家元は学校であり、歌舞練場は大劇場。そしてもっとも大切なのが旦那、つまりパトロンです。そうした分業体制とチームワークに加え、花街文化を愛し守りたいという皆の気持があってこそ、今日まで継承されているんですね。

堀井 さきごろ大阪大学中之島センターで、大阪大学の鷲田総長やコシノヒロコさんたちの呼び掛けで、アーティストと社会を結び付ける『アートアッセンブリー』という催しがありました。こうしたことも文化のプロデュースだと思いました。

武田 大学の大切な使命のひとつに、学生を育て社会に送り出すことがあります。アートアッセンブリーは、そうした学生の実地トレーニングをしながらプロデュース力を養い、かつ大阪文化への貢献もするという一石二鳥、三鳥を狙ったものです。21世紀懐徳堂も、音楽会などに学生が主体的に活動してもらうことでプロデュース力を養い、演奏家と企業とのマッチングを図るなど、さまざまな試みの場になっています。

堀井 21世紀懐徳堂を窓口として関西の大学の知的ネットワークが張り巡らされ、社会学連携の中心となって活躍する。それによってプロデュース能力が高まり、市民も創造的に参加できるムーブメントが起こると良いですね。関西財界セミナーでも道州制が議論されていますが、それが現実のものとなるためには、そうした関西の文化的ネットワークの構築が必要なのではないでしょうか。

萩尾 関西停滞の原因が中枢機能と自律性の欠如にあるという視点で、これをなんとかしようという経緯のなかで、早くから道州制の議論が起きました。とはいえ関西の自治体は道州制には消極的で、むしろ九州で熱心に議論されています。かつて関西経済同友会の代表幹事だった鳥井信一郎さん(当時サントリー社長・故人)が、「地域主権」ということを提唱されました。地方分権ではなく地域主権だと。地方が自律していないと、いつまでも東京の植民地なんですね。そんな状況で生き生きとした文化は生まれません。また、文化についてはあまり行政に頼ってはいけないと思います。行政はインフラに金を出すだけで、あとは口出ししない。だから文化のプロデューサー役は民間から適任者を出し、それを皆でバックアップする体制で臨むべきだと思います。大阪21世紀協会が設立されたときは、大阪だけではなく関西をもっと活性化しようという志に燃えた人たちで、すごい熱気を感じました。それを思うと今の大阪の状況は非常に寂しい。苦しい経済環境ではありますが、民間の力でやっていくことが必要だと思います。

佐藤 地域主権という意味においては、これからは大学が大きな



ワッハ上方 (大阪府立上方演芸資料館)

大阪府民の誇るべき文化財産
伊東雄三 館長 談

大阪府が文化行政の一環として演芸資料館をつくる構想を立てたのが平成元年。以来20年間、府民などに呼びかけて、昔の演芸台本や舞台衣裳、レコードなど約5万7千点もの資料が寄贈されました。在阪の放送局からも昭和30年代から今日までの約2700もの演芸番組を無料で提供していただき、当館の演芸ライブラリーで閲覧いただけます。これらは大阪府民の誇るべき文化財産です。また、305席の公立の演芸・演劇ホールとして稼働しているのは大阪市内でここだけ。ワッハ上方は、上方演芸発祥の地・ミナミで、地域の方々をはじめ多くの方々に支えられているのです。

